

自分のことを知っている度合いを **Self Awareness** という。自己認識能力である。日本の課題の一つは、このセルフアウェアネスが強い子どもをもっと増やしていくことだという。小学校へ入学してから大学を出るまで16年間もある。にもかかわらず、自分が何者で、どんな特徴があつて、どんなときに幸せを感じるから、どんな職に就いて、どのような人生を送りたいか、そういうことをほとんど考えさせない。

高校時代に、文系か理系かを選ぶ際にも、己の内面を問うことをスキップして、その時点で数学がどの程度できるかで半自動的に決まってしまうてはいないだろうか。進むべき大学や学部も、受験の可否と偏差値による世間評価との相場観で、それほど悩まなくても、ほぼ受動的に決まってしまう。その結果、セルフアウェアネスが未成熟なまま、己の軸がない状況のまま、就活が始まる人が多い。

我が家の娘も、ご多分に漏れず、そうだった。己の軸など、わからないまま就職活動、いわゆる就活を始めた。だが、エントリーシートを作成したり、面接をしたりする中で、自分が何者かがわかってきたのではなかろうか。面接は、短くても30分、長いときは90分に及ぶという。事前に準備したものだけでは太刀打ちできないだろう。自ずと、自分にはどんな特徴があつて、どのような人生を送りたいのかを考えるようになる。何社も受けているため、このようなことを何度も繰り返すことになる。

大人の中には、「まだ社会も知らないし、仕事もしたことがないのに、自分の強みや軸なんて考えてもわかる訳がない。そんなことは考えなくてよい」という人が少なからずいるだろう。それはそうなのだが、経験がないのに考えても仕方がないというのはどうなのだろう。

わかるということは、何がわからないのかをわかることである。考えたらわかることと、考えてもわからないことの境界が、自分なりに納得できるようになることではないか。自分なりに頭を使って考えれば、自分にとってわからない領域がどのあたりにあるのか、そのわからない程度もわかるようになる。感触がつかめるようになる。

わかるためには、何がわかれば解決できそうか、それもわかるようになる。想像できるようになる。自分なりに、その何かを得るために行動することが可能になるので、たとえわからないことが解消できていなくても、自分なりのベストで向き合っていることは、少なくともわかる。納得できるようになる。わからないなりに、やれることはやっていると認めること、それが心の安定につながる。

娘は自信がなかったはずである。それが、就活を通して鍛えられていき、変わってきた。自分のことを考えられるようになった。少しは、セルフアウェアネスが強くなったのではないか。就活とは、就職をするための活動である。だが、企業は、採用を通して若者を育てている。そんな一面もあるように思う。娘の机の前に貼ってあった。「声大きく 笑顔 ハキハキと」基本である。